
ジョーカーな狐と狸さん

ぺんぱるぺ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジョーカーな狐と狸さん

【Nコード】

N8951Z

【作者名】

ぺんぱるぺ

【あらすじ】

隔離された世界。鬼と呼ばれる化け物とこの世界は密接な関係にある。鬼は人を喰い殺し、ときには、鬼は人に能力を与える。中央エリアの片隅に住む香宮司^{ニウベウジ} 旧介^{キウスケ}は、復讐相手を探し続けていた。そして、復讐相手とうりふたつの少女が目の前に現れる。少女は頬を赤く染め、小さな声で告白した。「あなたのストーカーです。大好きです、付き合ってください！」僕さま青年とストーカー少女のお話です。

狐さんの世界の終わり（前書き）

初めまして。

小説と言えるかも分からない代物ですが、お読み頂ければ幸いです。

狐さんの世界の終わり

その日、香宮司 旧介の世界は終わりを迎えた。

何よりも大切に、陳腐な言葉を使うなら愛していたと表現しても良いような、掛け替えのない世界であった。

最後は笑ってしまうほどに呆気ないものだ。馬鹿馬鹿しいものでしかなかった。

それでも、そんなくならない崩壊でしかなかったとしても、旧介には永遠のことに思えて仕方ない。

自慢の長い髪を優雅に揺らし、旧介の全てであった彼女は美しく微笑んだ。神がいるならば、彼女のような存在であるのかもしれない。そう思わせる程のものを彼女は持っていた。

すらりとした足が、ゆっくりゆっくりとこちらへ近づいて来る。旧介は逃げなかった。いや、正確に言うならば、逃げることもできなかった。誰がこの状況で彼女から逃れられるだろうか。

旧介の身体はもうボロボロだった。腕は折れ、腹は切り裂かれ、激痛にただ堪えるだけしかできないような状態である。しかし、だからといって、旧介が無傷で体力も有り余っていたとしても、彼は逃げるなどという愚かな選択はしなかっただろう。

旧介の世界は終わったのだ。彼女は旧介の世界を作り上げ、慈しみ、そして破壊した。彼女がそうしたのだ。いや、彼女は彼女であって、彼女ではないのかもしれない。しかし、もうそんなことはどうでもよかった。

彼女は旧介を殺すだろう。簡単に、一瞬で全てを終えるに違いはない。それはあまりに残酷であり、恐怖であり、そして何よりも幸福なことであるのだ。たとえ旧介がここで生き残ったとして、何が残るといいのか。何も残らない。なぜならば、それが香宮司 旧介であつたからだ。彼女が居て、初めて彼は息をすることができる。

「お前は笑うのね」

鈴を鳴らしたような、澄んだ声音だった。

聞き親しんだ彼女の声は、こんな時でさえあまりに心地よく旧介の鼓膜を侵していく。

地面に倒れ込んだ旧介を真っ直ぐに見下ろす彼女は、どこまでも美しい存在だった。

「逃げないのか？ 私はお前を殺すのに。それは何があっても変わらないし、変えられない選択だ」

「逃げて、欲しいの、か？」

呼吸をただけで苦痛に悲鳴をあげる身体を酷使して、どうにか声を紡ぎだす。彼女からの言葉を無視するなどできるわけがない。彼女を見上げ、旧介は笑いかけた。

それを見て、彼女は初めてその笑みを崩してしまった。不愉快そうに曲げられた眉も、軽蔑していることを何より物語る細められた目も、何もかもがただ美しく、愛おしい。

恍惚とした表情を惜し気もなく晒す旧介を一瞥し、彼女は『彼女』を演じることをやめた。

「……私は長生きしているからさ、人間なんてそりゃあ腐る程見えてきたよ」

先程までとは何もかもが違う低い声と不機嫌に歪められた顔。もはやそれは彼女ではなかった。

「でもアンタみたいな気持ち悪いやつ見たのは初めてだ。最低最悪な気分になった、すげえ吐きそうだし」

「死ね」

「おや、やっぱり私じゃ優しくしてくれないのかな？ そっちの方が似合ってるよ、アンタ」

「黙れ、カスが。僕はあの人にしか用など無いんだよ、早くくたばれ」

「素敵な言葉と憎悪だね、アンタやっぱりいいよ。そっちの方がかっこいいし、私のタイプだわ」

今までの心酔しきった感情は瞬く間に消滅する。今、旧介にあるのはは酷い憎しみと嫌悪感だけであった。

それは夢を見ていたようにも思えることだ。悪夢ではない。素晴らしい幸福な、死んでも覚めたくない、そんな夢である。しかし、夢は何があるかと夢でしかない。夢は終わる。旧介の世界が終わるように。無情なまでに、一切の慈悲もなく。

彼女はもう彼女ではない。彼女の姿をした化け物だ。化け物よりもっと酷いものかもしれない。旧介は彼女の皮を被ったそれを睨みつけた。それは愉快そうに肩をすくめるだけだ。

（殺してやりたい。いや、そんなもんじゃ足りないだろうが…。このカスが存在していたその事実を消してやりたい。それができれば、僕は笑って死ねるだろうによ）

旧介の視線を考慮したのか、そいつはしゃがみ込んだ。彼女の目から通されるそいつの視線は不快でしかなかった。

旧介は静かに目を閉じる。旧介が見たかったものは、彼女だけだ。あとは何もいらぬ。むしろ、邪魔な不要物でしかない。

「私はお前を結構気に入ってるんだよ、旧介」

「気安く、名前を、呼ぶな」

旧介と呼ぶことを許したのは、彼女以外にはいない。

「なあ、旧介」

吐きそうだ。

ねっとりとした重い声が身体にのしかかる。それは旧介を決して逃がしてはくれない。

「私を殺しにおいて」

からからとそいつが愉しそうに笑い声をあげる。

殺しに？行くに決まっているだろう。もはや傷の影響で声も出ない。それでも、旧介はそいつへの復讐を誓った。忘れたくとも忘れられない、最低の誓いだった。

「約束だよ、旧介」

そうして、世界は静かに崩壊を迎えた。何も残らない筈のその世界には、憎悪と殺意だけが暗く、しかし、確実に残っている。

殺してやる。そう息もなく吐き出したと同時に、旧介の意識は途絶えた。

出会ってからの黙れ変態

「大将、大将、起きましょーや……今日仕事でしょ」

低くしゃがれた声が鼓膜を突き破る勢いで侵入する。

また、瞼を閉じていても分かる程の眩しさに、旧介は不満げに唸り声を上げた。

熟睡していたからか、身体が鉛のように重い。

もう朝であるにも関わらず、睡魔はいまだに旧介を逃がそうとはしなかった。はつきりしない意識のまま、旧介は何とか瞼を開く。瞬間、待っていましたとばかりに、視界を日光が埋め尽くした。

(……ねみイ)

欠伸を噛み殺し、旧介は心地好い布団から、嫌々ながらも這い出る。

明るさにも目が慣れてきたようで、部屋全体を緩慢に見回すと、慌ただしく動き回る影が視界に映り込む。

影は、男だった。

身長はざっと見たところ高い。坊主のように頭を丸めた大男は、旧介が起きたことに気づいたらしく、足早にこちらに駆け寄った。鋭く小さな目と、大きな鼻、そして何より口から頬まである大きな傷。相変わらずいつ見ても、恐ろしげな顔をしているな、と旧介は思った。

その厳つい男が目前まで迫ってきても、旧介は涼しげな顔を崩さなかった。男の威圧感などもうとうとに慣れていたのだ。

「大将、あんた今日……あの仕事の日なんですよ？ 分かっています？」

「……あの仕事？」

意味が分からないといった顔をしている旧介を見てから、男は大きな肩をがくりと落とした。その顔には「ああやはり」と書かれている。旧介がこの件を忘れているだろうことは、半ば予測していたらしい。

「仕事ってなに」

「……ホラ、鬼切りますとか言っただじゃないですか」

「ああ、そっぴゃそんなことも」

「アンタねえ……」

呆れたとばかりにため息を落としてから、大男は「どうなっても私は知りませんからね」と早口に述べる。

その腕には先ほどまで旧介が眠っていた布団が抱えられている。どうやらおまけに布団も片付けておくようだ。いったいいつの間にと驚く旧介に気付かないまま、大男は続けた。

「あ、でも金はちゃんと分けてくださいよ。いや、本当に」

言いたいことは言ったと、大男は満足げに笑った。そのずる賢さに旧介が冷えた視線を送れば、一転して彼はさつと表情を青ざめ、そして、旧介が何か言う前に、逃げるようにして男は隣の部屋へと走り去っていった。

その無駄な逃げ足の速さには、いつそ称賛の言葉を送ってやりたいものだ。

(……それにしても)

床は畳。あるものは筆筭と小さな机が一つのこぢんまりとした室

内。ここは旧介の部屋である。

嗅ぎなれた藺草いぐさの匂いにぼんやりと浸かりながらも、旧介は部屋で一つしかない窓から顔を出した。

外は、暑すぎるわけでも、寒すぎるわけでもない、程よい気温である。

青い空を何とはなしに見れば、直ぐに視界の中に灰色をした物体が映り込む。無意識のうちに、旧介は顔を歪めていた。

そこには壁があった。巨大な、天に向かってどこまでも伸びているような、そんな壁だった。

この世界には、『鬼』と呼ばれる化け物がいる。

鬼は人間の天敵と云われてきた。何故なら、鬼の好物は人間だからだ。しかも、鬼は簡単に殺すこともできない、まさしく化け物といってよい存在である。人間はただ食われるだけであつた。

しかし、ある科学者が鬼についての可能性を提示してから、化け物としての鬼の見方ががらりと変わる。

その可能性は大きく分けて二つある。

一つ。鬼には高い知能を持つものがある。

その中の大半の鬼は、人間と『契約』を結ぼうとする。

何故、鬼が人間と契約をしたがるのかは今のところ分かっていない。

契約を結べば、鬼は人間に力を分け与える。その能力の種類は千差万別だ。しかし、それはこれから何年、何十年と人間が進化したところで、確実に手に入れることのできない力である。

とはいえ、この契約はメリットばかりではない。当然だ。メリットの裏には必ずデメリットが存在する。

契約した人間の命は鬼が管理する。簡単に言えば、鬼は好き勝手に契約相手を殺すことができるのだ。

また、契約者がその規約を破ってしまったら、ペナルティーが執行

される。

その内容もバラバラだが、生き残れる可能性は限りなく0に近い。つまり、契約してしまえば、鬼に殺される未来は確定事項になる。しかし、それがあっても、異能力というものは人間にとって魅力的であった。

たとえ、それがどんなに愚かで、馬鹿馬鹿しい選択であっても、だ。

二つ。

鬼の持つ力と科学を合わせることで、今まで実現不可能だったものを開発することができる。

たとえば、空を飛ぶ車。たとえば、一定の場所から場所まで行き来ができるワープゾーン。科学の飛躍に鬼は役立つという可能性である。

科学者が提示した『鬼の可能性』はこれが全てだ。

最初は馬鹿な話だと人々は罵ったらしい。しかし、鬼のおかげで国が発達し、便利になると、人々の反発は目に見えて消えていった。こうして人間と鬼は切っても切れない関係となる。

しかも、この話はずっと昔の出来事であった。つまり、何百年もこの国は鬼に怯えながらも、共に歩いてきたことになる。

鬼が人を食うことに変わりはない。それに抵抗しようとしたところで、人は鬼に触れることもできず、無様に死ぬだろう。

鬼と人との間には、絶望的なまでの差があった。

それに加え、勝手に鬼を退治することは有罪だ。

鬼の殺生は、政府公認の『ジョーカー』と呼ばれる免許を持つ人間しか、できないことになっている。

しかし、いざジョーカーを雇って鬼を退治してもらおうと思っても、そうスムーズには行かない。依頼料として金が必要になるのだ。貧しい人間には一生かけても出せないだろうほどの、馬鹿げた大金

が。

それほどに鬼退治は危険を伴う。しかし、だからといって、貧乏人は喰われて死ねというのは、あまりに酷い話だ。

政府もそれを考慮し、この国をぐるりと囲む大きな壁を建てた。

鬼は外に生息している。つまり、外からやって来るのだ。その侵入を少しでも拒むために、壁を造った。

その成果あつてか、鬼の事件はひとまず減少する。しかし、全てが無くなるわけではなかった。

もともと、鬼が関与する事件は非常に多かった。それがようやく少し減っただけで、実際にはあまり違いは無いのだ。

それでも、この国に鬼はどうしても必要な物になってしまった。今更そう簡単に切り離すことなどできるわけがない。

(それは、やけに笑える話だ)

旧介は、灰色をした壁を眺めながら、皮肉げに笑った。見ているだけで苛立たしくなる、そんな笑みだった。

鬼は敵だ。

にも関わらず、その敵がいなければ、もう人間は生きていけなくなってしまった。喰われて、いよいよに扱われて、殺される。家畜にでもなった気になる。いや、実際、家畜と今の人間はそう変わらないのかもしれない。

ハア、と、息を吐く。

旧介の受けた仕事は、その鬼を殺して欲しいというものだった。

「鬼退治とか……すげえ久々だな。まあ、金がねえから仕方ないけど。銀貨何枚貰えるって約束だったかな」

「確か3枚だったと思います」

「あー3枚かあ。奮発してくれるねえ」

「香宮司くんが嬉しそうで私も嬉しいです。ところでまだ出発しないんですか？」

おっとりとした、可愛らしい声だった。そして、旧介が今まで生きてきた中で、一度として聞いたことのない声であった。付け加えるなら、この家に住んでいるのは、旧介と先ほどの大男だけだ。

（は？）

つまり、誰かも分からない相手が部屋におり、旧介と呑気に会話していることになる。

そうして、恐る恐る声のした方向に振り向けば、そこには少女が立っていた。

薄い橙色をした短い髪に、それより濃い色を持った大きな目。水色をした清楚なワンピースから覗く肌は、透けるように白い。

綺麗な少女だった。

そして、その少女は何故か顔を赤くさせ、唇をだらしく引き下げていた。

また、吐き出す息も荒く、ハアハアという呼吸の音がはっきりと聞こえる。

言葉は悪いが、変態にしか見えなかった。

（誰だよ。……何でハアハアいつてんだよ、何を盛り上がってんだよ……）

突然の侵入者に旧介は言葉が出なかった。というより、この状況で愕然としない人間がいるだろうか。いや、いるわけがない。

何も言えず、ましてや、動くことなど余計にできないまま、旧介は少女を呆然と見つめていた。

そして、その視線に、少女は赤い顔をまた赤くさせる。

（え、なに、こいつ）

正面にいる名も知らぬ少女は、申し訳ないが気持ち悪い存在である。

もとより表情豊かというわけではない旧介は、その感情が表に出なかったことに小さく安堵した。

しかし、このままでは埒が明かない。旧介は舌を纏れさせながらも、何とか声を吐き出した。

「……お前、なに？ 何で僕の部屋にいるんだ？ というか、銀貨の話をどうして知ってる？」

「ま、待ってください！ 順番に説明します、しますから……あの「なんだよ」

旧介の質問責めに、少女は慌ただしい声を上げた。白く細い指先はカタカタと小さく震えている。また、大きな目は今にも涙が出そうなほど、揺れていた。

その姿は小動物によく似ている。まるで自分が虐めているような錯覚に囚われ、旧介は黙り込んだ。

少女は困惑しているようで、目をあちらこちらに忙しく動かしている。握り込んだ手を一段と強く握り、少女は目を閉じた。

「落ち着け、落ち着け、大丈夫だから」そうやって自分自身に言い聞かせるように言葉を繰り返し、少女はとうとう目を開けた。

先程とは打って変わり、落ち着き払った眼差しは、どこまでも真っ直ぐに旧介だけを見ている。

少女は大きく息を吸い込み、そして、言葉を吐き出した。

「私、あなたのストーカーです。大好きです。付き合ってください！」

それまでの雰囲気、ガラガラと音をたてて崩壊していくのを感じながら、旧介は渴いた笑い声を上げた。それしかできなかった。予想外にも程があるだろう。こちらを幸せそうに見つめる少女に、旧介は笑いかけた。

「黙れ変態」

少女はそれでも微笑んだままであった。

これは単なる気まぐれでしかない

香宮司 旧介きゅうすけの見た目は平々凡々なものだった。

枯れ草のような、痛んだ薄い金色の長髪を乱雑にゴムで括り、上下ジャージという、どこからどう見てもだらしない姿。

牛乳は嫌いだが、身長は高い。

顔は吊り目と、赤い目が時折相手に悪印象を与える。しかし、好印象を与えたことはない。

つまり、普通の、平均より身長が高く、少しばかり目つきの悪い青年なのだ。

そんな代わり映えのしない男のストーカーをしている少女は、旧介にとって全く理解不能な存在であった。

そんなストーカー少女は、のほんと旧介がどうかっこいいのかを、一人で語っている。目を逸らしたくなる光景だった。

しかし、このままでは状況は進展しない。

とりあえず、旧介は少女とできる限りの距離を取ることから始めた。

さすがにストーカーと並んで和気藹々と話せるほど、お気楽な性格はしていない。

部屋の隅に移動した旧介を見ても、少女に気を害した様子はなかった。

「結果的に、お前、何なの？」

「え！ あ……でも、その前にあの」

「何？」

嫌な予感がした。

少女はちらちらと旧介を見ては、目を下ろし、見ては、顔を手で

覆い、不審な動作を繰り返す。

何かの儀式かと、馬鹿馬鹿しいことを考えながら、旧介はそれを見ていた。

「こ、告白の返事は……」

「却下」

あまりにも早い反応だと、返事を返した旧介自身が驚いた。

「で、ですよねえ！」

えへ、えへへ、と落胆した様子の少女は、少しばかり気の毒ではあった。

「まあ、それより、お前は何なんだ？ 名前は？ まじでストーリーカ
ーやってんの？」

旧介の質問に、少女は眉を垂れ下げたまま、それでも、丁寧に答えていった。

少女の返事を要約すると、以下のようになる。

・少女の名前は『メール・エナフィノール』という。

・旧介に惚れているらしい。

・旧介が好きで仕方ないらしい。

・旧介のためなら何でもできるらしい。

・好きだ惚れたただのが含まれた内容は無視することに決める。

・旧介のストーリーカーを始めたのは一年前から。（本当は12月2

9日11時58分前かららしい。怖い）

・鬼退治のことは、たまたま仕掛けた盗聴器で聞いた。銀貨の話もそれで聞いた。

「……分かってくれましたか？ やっぱり、いきなり香宮司かみやうじくんに告白するのはやめた方がいかなって思ってたんですけど、あまりに今日の香宮司かみやうじくんがかつこよくてもう我慢できなくて」

「あー。ちょいストップ」

「あ、はい！ 何ですか？」

ストーカー少女、もとい、メイル・エナフィノーラは長々と頼んでもいない独白を即座に切り捨て、旧介の言葉を待った。

もしもメイルに尻尾でも生えていれば、それははち切れんばかりに振られていたのだろう。

旧介はメイルから聞き出したことを纏めたメモを見ながら、鬱々とした心持ちで尋ねる。

「お前、盗聴器仕掛けてたのか……？」

問題はやはりこれだろう。

そんなに易々と流せる話ではない。というよりこれは確実に犯罪だろう。

ストーカーはストーカーでも、末期的なものなのかもしれない。最悪だ。

そんな旧介の内心など何も知らず、メイルは晴れ晴れとした笑みを作り上げ、憎たらしくなるまでに綺麗な声で答えた。

「はい！ 盗聴器だけじゃなくて、一応、盗撮もしてました。でもああいう機械って難しいですよ……。雑音入っちゃうし。“鬼入り”のやつは高くて買えないし、大好きな香宮司かみやうじくんのためにならお金なんてどうてことないって思ったんですけど、やっぱり高い力メラは買えなくて……」

「お前に金が無くてとても幸せだよ」

“鬼入り”とは、既製品（例えば、電化製品や自動車など）と、鬼の力を掛け合わせて造られたものを指す。

鬼入りの製品は、全ての点において既製のそれよりも上位にあるものだ。

簡単にいうなら、寿命も長く、効率的で、非常に便利な製品だろうか。

ただ、高価な品なので、裕福な人間以外はなかなか手が出せない、というのが唯一のマイナス点でもある。

しかし、どうしたものだろうか。

旧介の人生の中で、ストーカーに遭ったなどということは、当然だが無かった。むしろ、ストーカーに遭うなんて、それだけで貴重な体験だろう。

頭を抱えなくなった。

室内が冷えた雰囲気陥っていくのにも、メールは気付かないように、何が楽しいのか旧介を見つめ続けている。

「やっぱり……ニハハハハ香宮司くんはかつこいいなあ」

不幸にも耳に届いてしまった、うつとりとした声に、旧介はぞわぞわと背中に悪寒が走るのを感じた。

メールは旧介を知っているのかもしれない。いや、知っているのだろう。

盗聴盗撮、そして、話には出ていないが、尾行だとかそういうこともしていそうだ。さすがに出したゴミ袋を漁るなんてことは、しないで欲しくない。聞く勇氣もない。

しかし、しかし、だ。

旧介はメールのことを全く何も知らない。

20分前によくやく存在を知ったばかりだ。しかも、会って直ぐ

のストーカー宣言。一年間も続けていたというおまけ付きだ。
クーリング・オフ機能は無いのだろうか。

そこまで考えて、旧介はある違和感にたどり着いた。いや、違和感という程でも無いのかもしれない。

「お前さ」

「は、はい！ 何ですか！」

素早い反応に苦笑いがもれる。

外見は可愛いのに、中身はどうしてこうも残念なのだろう。
神様とやらは、時に酷いことをするものだ。

「何で僕が好きなんだ？ どうしてストーカーなんてしようと思った？」

「え、あ、あの……そ、それは……」

違和感はこれだった。

メールに惚れられ、ましてやストーカーに発展させるような、そんな何かを旧介は持っていない。

これ程にメールが旧介に心酔する理由が無いことに、違和感を感じたのだ。

とは言え、もともとメールのことは全く理解できない。なので、その理由を聞いても、納得できるか微妙なところだった。

メールを見る。

またその顔が赤くなる。これ以上赤くなったら、茹蛸になってしまふかもしれない。

まあ、メールの赤面する気持ちが分からないわけではない。

『どうして僕が好きなのか』という問いに答えるためには、告白まがいのことを言わねばなくなる。いや、“まがい”でもなく、告白になるだろう。

しかし、出会った瞬間『ストーカー宣言＋付き合ってください』
と高らかに叫んだので、そういう羞恥はてつきりメールには無いの
かとばかり思っていた。

どうやらそれは外れであるらしい。

「あ、あの……それは、こ、香宮司くんが」

「僕が？」

「香宮司くんが……」

「ああ」

沈黙。

しかし、先程までの冷え冷えとした雰囲気とは違う、まだ居心地
のよいそれであった。

メールは耳まで赤くさせている。年下は好みではない旧介も、ふ
るふると震える小動物のような姿には、少しばかりぐっと来るもの
があった。

しかし、それでも、悲しいことにメールはストーカーだ。

とうとう覚悟ができたらしく、メールは唇をゆっくりと開いた。

旧介はその言葉を、ただ待っていた。

「……あの時、香宮司くんが私を」

「大将！ アンタ、本当にいつ仕事行くんですか！ 依頼人が怒っ
たらお金貰えないじゃないすか！ お金様が！」

今までの空気を全て破壊した、坊主頭の男は即座に、『自分がと
んでもない状況で部屋に入ってしまった』ことに気付いた。気付い
たが、旧介と距離を置いて座る、見たことのない可憐な少女を見て、
思考が停止する。

黙っていればよかったのだ。黙って、部屋から何事もなかったよ

うに退出すれば、それでよかった。

しかし、男は言わずにいられない。

「可愛い女の子を部屋に連れ込んで、なに自分だけいいことしようとしてんすかああ！ 死ぬほど羨ましい！ ちよつと私にも紹介し、

」

全て言い終える前に、男の顔面に旧介の拳がめり込んだ。

場所は旧介の部屋から、居間に移る。

小さなちゃぶ台を囲むように、大男、ジャージ男、そしてストーカー少女が座っている。

見るからに異様なメンバーであった。

しかし、その雰囲気は非常に明るい。

「そうなんすか、私アてつきり大将が彼女でも作ったんだとばかり」

「か、かか、彼女なんてそそそんな！いつかなりたいです！」

「その未来は来ねえから安心しろ」

「大将、アンタ辛辣すぎません？こんな可愛い子に……」

大男からの非難を軽く無視し、ジャージ男、もとい旧介はメールをちらりと盗み見る。

出さなくてもいい、というか出すな。そう言っただにも関わらず、でへでへと鼻の下を伸ばしながら、大男が入れた茶を、メールは幸福そうに飲んでいた。

大男の名は、「ガリル」という。旧介とは長い付き合いで、この家では家事全般を担当している。好きなものは金と女。何しろ、ガリル自身が酷い強面なので、近寄って来る女性は少ない。

そんなガリルにとって、外見も文句なしで普通に会話できるメイルは、貴重だということもよく分かる。百歩譲って、媚びへつらっているのも許そう。

しかし、天変地異が起ころうが、その少女がストーカーであることに変わりはない。むしろ犯罪者予備軍でもある。

そんな相手と何が嬉しくて茶を飲まねばならないのか。全く面倒臭いことになった。

「お前、メールだっけ」

「は、はい！」

今まで飲んでいた茶を机にたたき付ける勢いで、メールは声を裏返せながら返事をする。

どうやら名前を呼んで貰えたことが嬉しかったらしい。

本当に犬だなど、半ば呆れつつ、旧介はずっと思っていたことを告げる。

「お前、いつ出ていくの」

「は？！ 大将、嘘でしょ？ こんなに可愛い女の子になんてことを言って」

「ハゲは黙っとけ」

ぎゃあぎゃああと抗議の声を上げるガリルを睨みつける。瞬間、ガリルは口を閉じた。

可愛い女の子と旧介を秤にかけた結果、後者に従う方が賢明だと判断したらしい。賢い選択だ。

黙り込んだメールを見る。名前を呼ばれた時の嬉しさはどこに消

えたのか、悲しそうに唇を噛んでいた。

しかし、それでも容赦はしない。

始まりからおかしかったのだ。今のメールは、この家の異端でしかない。ここにいるべきではない人間だ。

ただ、一つ心残りがあるとするとするなら、メールの言いかけたあの言葉の続きだった。

確かに、メールは『あの時』と言っていた。過去の話なのだろう。『あの時』がいつを指すか、さすがに正確には分からないが。

これはあくまで旧介の予想だ。答えはメールしか知らないのだから、その予測の正当性は分からない。

旧介はメールに会ったことがあるのかもしれない。

メールはこう言った。「あの時、香宮司くんが私を」ここまでしか聞き取ることではできなかったが、これがどう続くのであれ、会っていないければ何が Continuing でも難しいように思える。

まあ、いくら考えたところで、答えは出ないのだが。

「……そう、ですよね」

その暗い声に、それまでの思考が掻き消される。

メールの顔は酷い有様だった。あんなにころころと変わっていた表情は、どこに行ってしまったのか、笑みを保つのがやっとの渴いたそれ。見ているだけで、気の毒になるほどだった。

それでも、旧介は何も言わなかった。

「出ていきます。ごめんなさい。非常識でしたよね。いきなりだし

……」

「本当にな」

同意の声を示した旧介に、責めるようにガリルが視線を送る。

しかし、旧介はそれを気にもせず、ただ真っ直ぐにメールを見て

いた。

顔を青白くさせたメイルは、それでも笑いだけは保っている。痛々しい表情だった。

メイルはゆっくりと立ち上がる。ふらふらと身体が不安定なのは、精神的なショックからだろうか。

ガリルの玄関まで案内するという提案を、柔らかに断る。ストーリーなので、家の間取りは分かっているのだろう。

断られても、しつこく食い下がるガリルと断るメイルの押し問答をぼんやり眺める。

薄い橙色の髪が力無く揺れていた。

それは、あの光景にどこか似ている。

旧介の世界が終わったあの日。彼女の皮を被ったあの化け物も、髪を揺らして笑っていた。

そこで初めて気付かされる。

メイルは彼女に似ていた。むしろ、どうして今まで気付かなかったのか。髪の色も笑い方も声も全てが全て、あまりにも彼女に似過ぎていたというのに。

記憶を封印していたのかもしれないと、旧介は自分自身を嘲笑せずにはいられなかった。

これは逃避でしかない。

「本当に大丈夫ですから。優しくしてくださって、ありがとうございます。お茶、美味しかったです」

「……そうですか」

ようやくあちらの話し合いは済んだらしく、諦めたガリルと微笑みを絶やさないメイルがいた。

メイルは一度こちらを見た。怒られた子供のような目をしている。小さくお辞儀をしてから、口だけが「ありがとうございました」

と動く。

「おい」

旧介の声に、メイルは肩を大きく跳ねさせた。また何か言われるのかもしれないと、少し怯えの混じった大きな目が、それでも嬉しそうにこちらを見る。

「お前……いや、メイル。このあと、暇なのか？」

「……え？」

「暇なのか、暇じゃねえのか、どっちだ」

メイルもガリルも、同じ顔をしていた。驚愕だ。

先程まではあれだけ出ていけ出ていけと口うるさく言っていた旧介が、突然こんなことを聞いたのだ。驚くのが普通だろう。

呆然としたままメイルは、旧介が言った言葉を、聞き直すように繰り返した。

そして、笑う。満面の笑みだった。

「ひ、暇です！ 暇すぎて本当にいろいろとあの大変なくらい暇で……」

「今からさ、鬼さんぶつ殺しに行くんだよな。一人もなんかあれだし、来るか？」

「iiiiiiii行きます！」

旧介はメイルに笑いかけた。

「じゃあ用意してこい。あとで家の前で集合な」
「はひ！」

思いつきり舌を嚙んだらしく、手で口を抑えながらも、メールはすごい速さで走り去った。

今から家に帰って用意を整えるのだろう。

ああ。それにしても似ているようで、似ていない。似ていないように、似ている。

メールには酷なことをしているのだろう。

それでも、旧介の気まぐれな選択は変わらなかった。

約束ですよ？

広がる青空の真下に、灰色のトンネルがある。

一見、鉄で造られたように見えるそれは、鉄であって鉄でない物から出来ていた。

鬼入りの鉄。それと特殊な人工知能を持つ機械。これらは、科学と鬼の融合により新しく造られ、時代を一気に発展させた新しい科学だ。

そしてこのトンネルはそれをふんだんに使った、最新型のワープゾーンであった。

とはいえ、歩行型と呼ばれるこの機種は、移動する人間も共に動かねば作動しない。短時間で目当ての地に行くことは可能だが、ハイテクな機械というより、ただ単に少し長いトンネルを歩いているようにしか思えないのが、少しばかり間抜けな点である。

トンネルの中は、一言で言うなら白い。とにかく白い。

清潔感を出すために白い壁にしたらしいが、逆にどこまで言っても白ばかりが目に入る光景は不気味にさえ思われる。

そんな白の中を、旧介とメイルは歩いていった。

二人の手にはぺらぺらとした薄い紙が握られている。青い背景に、赤い文字という目に悪い色彩が並べられたそれは、このワープゾーンのチケットだった。

「便利になりましたよね。ワープゾーン一回につき銅貨5枚だななんて」

「いつそ便利にするくらいなら、歩かなくてもいいヤツ作ればよかったのにな」

「え？ でも香宮司くんは歩くの好きですよね？」

黄色いショルダーバッグを肩からぶら下げながら、メイルは質問ではなく確認のための言葉を吐き出した。

メイルはストーカーだ。一年という保証付きの、裁判なら有罪になってもおかしくない程に酷いストーカーだ。

もしかすると、旧介よりも旧介を知り尽くしているかもしれない。だからこそその確認。なぜなら、彼女は『旧介は歩くのが好き』という事実を知っているからだ。

「……………何でそう思うんだ」

「香宮司くん、いつも朝6時に軽いウォーキングをしてるじゃないですか。だから歩くの好きなんだあって」

たしかに、旧介は毎朝6時に軽いウォーキングをしている。朝だと頭が上手く働かないことに加え、もとより歩くことが好きだからだ。

初対面の相手が自分のことを何でも知っている、というのはやはり気持ちが良いくない。

「お前さ」

「はい！」

「そうやって普通にストーカー知識を話すな。引くから」

「え……………あ、ご、ごめんなさい！　そうですよね。普通は引きますよね」

「分かったならいいけどさ」

ひたすら続く白を眺めながら、旧介はできるだけ厳しい声音にならないよう注意していた。

メイルは本当に表情豊かな少女だ。落ち込んだかと思えば、次の瞬間にはすでに笑っている。

特に旧介からの言葉には敏感で、何気ない一言に涙目にまでなっ

しまつのだからただけない。

（振り回されてるなア）

身長差がなかあるため、旧介はメールを見下ろすことになる。ふわふわと羽の様に揺れる髪の毛が視界にちらちらと映り込んで消えるのを繰り返す。

「……にしても」

「どうしたんですか？」

「よく付いて来ようと思ったよな、お前。いや、誘ったのは僕だけだ」

仮にも、鬼退治だ。話しか聞いていないので、鬼がどれだけ強いのかも分からない。

はつきり言つて、とても危険な仕事なのだ。

それに、特技がストーカーの少女をホイホイ連れて来てしまつてよかったのだろうか。旧介は早くも後悔していた。

家から出る際、ガリルに何度も言われた言葉を思い出す。

ガリルは鬼退治にメールを連れていくことに反対していた。

当然の反応だろう。

死ぬ可能性さえあるそれに、ストーカーである反面、可愛い少女のメールをお供にするのは決して良い判断ではない。

それでも何故か、旧介はメールを連れて行こうと思ったのだ。気まぐれにしては、頑固な気まぐれであるが。

「まあ、鬼退治にまで連れていくなんて馬鹿なことしねえけどさア。どっかの宿借りて、そこで待っててくれりゃあ良いんだけど。それでもやっぱり危険なのは危険だろうし。悪いときには、死ぬかもしれない」

れねえのに」

「……付いて行きますよ？」

「は？」

迷いのない、冷静な声が鼓膜を揺らす。

唐突にメイルが旧介の横から正面に動いた。呆然と動き回る小さな少女を見つめていれば、メイルは橙色の目を旧介に向ける。どこまでも深く、引き込まれそうな橙色だった。

「私は香宮司くんから離れません。鬼を退治する時も付いて行きます。私が足手まといだと思ったら捨ててください。私を盾に使えるのなら、利用してください」

「死にたいのか？」

「ち、違いますよお！ でも香宮司くんの邪魔になるのは嫌だし……。それに香宮司くんを利用して貰えるなら嬉しいです。その結果たとえ死ぬことがあっても、私は笑えます」

メイルの頭はおかしいのだと、旧介はそう思った。

薄々気付いてはいたが、メイルの価値観と旧介のそれはあまりに違いすぎる。

メイルが旧介を好きだとして、死ぬものだろうか？そんなに簡単に、微笑みを携えたまま話せるようなものなのか？

普通は違う。違うに決まっている。

メイルは異常だ。

「あ……でも」

「なに？」

「わ、我が儘なお願いなんですが」

そう言って、メイルは唇を噛んだ。言っているのか悩んでいる

らしい。

旧介は特に急かすことはせず、目の前の少女を見ていた。異端で歪みに歪みきった、頭のおかしいストーカー。

笑える程に、酷い存在だ。

「駄目ならいいんです、いいんですけど」

「ああ」

恥ずかしげに旧介を上目遣いで見てから、メイルはおそろおそろ口を開いた。

「もしも私が死ぬようなことがあったら、その時は香宮司くんが私を看取ってください」

異常者のその願いを聞いても、旧介は何も言い返せなかった。

意味が分からなかった。

いや、意味は分かる。死ぬ時に傍に居てほしいということだろう。ただ、それを言う意味が分からない。

（コイツ連れて来ねえ方がまじでよかったかも）

理解の範囲外にいるメイルは、旧介にとって宇宙人のようなものだった。言葉も思考も種類も全てが違う。だから理解できなくても許される。

しかし、メイルは人間だ。言葉も通じるし、種族だって同じである。

違うのは生き方だけだ。それが決定的に違いすぎる。

（……………もういいや）

そして、旧介はメイルを理解することを諦めた。

「分かった分かった死ぬ時は見ててやるよ。サービスで頭も撫でてやる」

「うえ?! ほほ、本当ですか! えっ ええ……」

「キモい。騒ぐな」

「す、すみません」

メイルの口元はだらしなくにやけている。

頭を撫でるといふ、それだけのことでこんなに喜べるのは、純粹にすごいことだろう。

この話をいい加減に切り上げるため、旧介は止めていた足をまた動かし始めた。

向かい側にいるメイルを押しつけ、また長い白を進む。

置いていかれるのを恐れたのか、直ぐにメイルが隣に並んでいた。

「……約束ですよ」

「分かったって。違う話しろ」

些か乱暴に旧介が要求した話題の変更にも、メイルは文句を言わなかった。

(従順なのか、そうじゃないのかよく分かんない奴だな)

「じゃあ、ううん……。あ、そういえば、香宮司くんって、ジョーカーじゃないですよね?」

「ん? ああ、そうだな」

ジョーカーとは、鬼を退治する人間が持つ政府公認の許可証だ。時に、その許可証を持つ人間をそのままジョーカーと呼ぶこともあ

る。

ジョーカーでない人間が、鬼を退治することは犯罪だ。

「……え、だ、大丈夫なんですか？ 鬼退治に行くんですね？」

「大丈夫、依頼人もその点については了承してる」

「そういうことじゃなくって、……犯罪ですよ？」

「ストーカーが何を言ってるんだ？」

その日旧介が発した声の中で、一番、冷めた低い音だった。

さすがのメールも、小さな肩を揺らして怯えた表情をしている。

旧介は普通の青年である。

ただ人より高い身長と、鋭い赤目のせいで、威圧感是有り余る程にあった。

「え……で、でも、じゃあ」

メールの声は震えている。さすがに言い過ぎたかもしれない。

メールがストーカーなのは何よりの事実ではあるが。

気まずい空気に、旧介は枯れ草色をした長い髪を、落ち着きなく弄りだした。

それは、困ったときや考え事をするときの旧介の癖である。

（面倒臭え、びびるなよ。本当のことだろ）

トンネルの出口が見えはじめた。やけに長い時間だったように思えるが、実際は10分も経っていない。

本来、依頼人のいる場所に行くためには三日かかる。それを10分歩くだけで行き着くことができるのだから、ワープゾーンもなかなかに侮れない。

しかし、今の旧介にそんな些細なことはどうでもいい。

トンネルを抜けた後も、こんなに気まずい雰囲気なのだろうか。

それはあまりに苦痛だ。

隣の橙色をした頭を盗み見る。

だが、旧介とほぼ同時に、メールも顔を上げていた。合わさる視線。

「……おい、いつまでも」

「じゃあ私たちお揃いですね！」

うじうじするなよ。旧介なりの気遣いの言葉は、甲高い少女の声に見事に掻き消された。

「は？」

「だって、ストーカーの私と、ジョーカーじゃないけど仕事を受ける香宮司（カノミツノシ）くん。どっちも犯罪者ですよ。あ、まだ予備軍になるのかな」

「は？」

トンネルの出口にたどり着く。ようやく目的地に着いた喜びを噛み締める前に、旧介は硬直していた。

「わ、私たち、運命の赤い糸で繋がってるのかも……」

えへへと特有の笑い声を上げたメールを見ながら、旧介は思い知っていた。

理解できるとかできないとか、そういう問題ではないと。

思わず、目の前の少女に「お前宇宙人だろ？」と聞いてしまいそうになるのを、旧介は必死で堪えていた。

初めまして依頼主さんこんにちは

「い、依頼主さんはやけに辺鄙なところに住んでるんですね？」

「そうでもねえと思うけどな。僕の家周りだってこんなもんだろ」
「こんなに酷くは無いと思いますよ……」

旧介とメールは森の中に居た。

トンネルから出た後、目的地の途中にある小さな町で宿を借り、そこに邪魔になりそうな荷物を全て置いてきた。

なので、今の旧介もメールもとても身軽な状態にある。
目的地までの地図を片手に持ちながら、旧介は歩きにくい木々の中を、楽々と通り抜けた。

時刻は昼。昼食は宿で取ってきたために、空腹感を感じない。

「あとどれくらいで着く予定なのか、教えてくれませんか？」

朝やトンネルの中で聞いたものより、幾分かトーンの落ちた声に、旧介は後ろを振り返る。

髪の毛に葉っぱや蜘蛛の巣を絡め、激しい運動のせいか息を荒げ、それでも懸命に歩き続けるメールがそこに居た。

旧介にしてみれば、どうということはない道であっても、女性であるメールにこの場所はなかなか過酷なようである。

（それでも、頑張ってる方ではあるんだけどなア……）

ストーカーだったからか、それとも基より体力はあったのか、こちらの女性よりは体力もあるし、運動神経も申し分ない。それに加え、メールの凄い所は弱音を吐かないことだろう。

かれこれ、道とも呼べない森の中を2時間は歩いている。正確な時間は計っていないので、それ以上ということもあるかもしれない。その間、メイルは一度として弱音を言わなかった。疲れは確実に溜まっているだろうに、旧介に遅れを取ることをさえ無かったのである。

根性があるのか、はたまた我慢強いだけなのか、旧介には判別できない。だが、うだうだと弱音を吐く意気地無しが同伴であった場合を考えれば、メイルの強さはとても幸運なことだろう。

「あと少しで着く。……しんどいなら、一旦休憩するか？」

「いえ、大丈夫です！ これくらい全然へっちゃらです」

「我慢強いのはいいことだけどさ、それで後々ぶつ倒れるようなことがあると困るんだよな」

「大丈夫です！ 心配して、くれてるんですよ？ 幸せです。香こ

宮司うぐつじくんをもっと好きになっちゃいそうです……」

「ああそう」

今度は別の意味で頬を赤らめ、口元をだらしなく下げるメイルに、旧介は分かりやすく眉を歪めた。

心配をしたわけではなく、本当に倒れられると迷惑なのでそう言ったのだが、これだけの軽口で返せるなら大丈夫なのだろう。

旧介は、止めていた足を再び動かし始めた。

何故、依頼人の家がこれ程に到達しにくい場所にあるのか。

その答えはとても簡単だ。

鬼に狙われている人間は、総じて“鬼憑き”と呼ばれている。そして、鬼憑きになった人間が何より恐れるべき相手は鬼ではない。

周りの人間たちである。

あまりにも皮肉な話だ。だが、それはある意味当然のことでもあるのだろう。

“鬼憑き”に人を襲う気が無かったとしても、周りの人々はそれをやすやすと信じるだろうか？受け入れるだろうか？

そんなわけがない。

鬼は人を食い殺す化け物だ。

それに憑かれた人間はもはや人間ではなく、化け物同然だと人々はそう考える。仕方がないことだ。なぜなら人々にとって、鬼は恐怖の対象でしかないのだから。

そうした環境で“鬼憑き”は虐げられ、忌避され、迫害を受けることになる。最悪、鬼では無いにも関わらず、『鬼退治』として殺されることもある。

だから、鬼憑き達は人から隠れるために森や山に逃げ込む。そうする以外に、自身を守る術が無いからだ。

「あ、香宮司くん。もしかして、あの小屋が目的地ですか？」

「ん？ ああ、あれだな」

今回の依頼人もその例外ではなく、こんな人里離れた森の奥に住んでいるのだろう。

メールの指差した方向を見れば、薄汚れた小屋がぽつんと寂しげに建っている。地面は湿り気を帯び、蔓延る木々のせいで太陽の光は注がれない、暗い場所であった。

小屋との距離を狭めながら、旧介は隣に並んだメールを見ることがもなく、口を開いた。

「お前さ、分かってるとは思っただけど」

「何ですか？」

「僕と依頼人が話してる時に、変な口出しは絶対にするな。黙って後ろで見ておけ。ただ、もしも気になることがあれば、それは僕と二人だけになってから言え。いいな？」

「はい！頑張つて黙りますね」

黙ることに、頑張るも頑張らないも無いだろう。思わずそう突っ込んでしまいそうになるのを、旧介は何とか堪えた。

なぜなら、黙れだの何だのという明らかに酷い命令を言われたにも関わらず、メールがやけにそれに意気込んでいるからだ。

「必ず任務を遂行させてみせます！ 期待しててくださいね」

「……ああ、期待しとく」

旧介は、棒読みでそう答えた。そう言う他に何ができたのだろう。黙るなんてやろうと思えば、子供にもできることだ。

それをどうしてこうも重大任務を背負った期待の星みたいな顔をするのか。

とはいえ、命令に従わないよりは確実にいい反応だということも事実ではある。

（扱い方がよく分からねえな、コイツ……。ストーカーをうまく扱う10の方法とかいうマニュアルあったらいいんだけど）

メールの明るい雰囲気は呑まれ、馬鹿馬鹿しいことを真剣に考えながら、旧介はゆっくりと足を止めた。

目前に立ちはだかるは件の小屋くだんである。

遠くから見ていると気付かなかったが、壁は腐りかけの木できており、穴や傷などがそこかしこにあった。腐りかけの木はともかく、穴や傷は見えている限り人為的なものである。

やはり、迫害されているのだろう。

依頼人も、好んでこんな場所に住んでいるわけではあるまい。もともと住んでいた場所は、旧介とメールが宿を借りた町辺りやもしれない。あれ以外、ここらに町は無いからだ。

旧介はメイルを一瞥してから、ぼろぼろになった扉を叩いた。それだけの振動で悲鳴を上げて軋むのだから、もうこの小屋はそう永くないのだろう。

「……はい？」

「初めまして。今回、“鬼退治”を依頼して頂いた者です」

扉から、警戒心を丸出しにしながら出て来たのは背の高い女性であつた。

すらりとした長い手足と、艶のある真っ直ぐな長い茶髪。鋭い目の下には、ありありと隈が存在を主張している。服もみすばらしいものであり、彼女が苦しい生活をしていることは一目で分かった。

鬼退治。

その言葉を聞いた瞬間に、女の表情が一変する。それは、地獄でようやく救いの光を見た人間のそれに似ていた。

がしりと、唐突に、女は旧介の肩を掴んだ。爪がジャージを通して皮膚に食い込みそうなほどの力に、旧介の眉間に僅かばかりの皺が寄る。

「お、お、遅いんだよ……！ あ、あたしが、ど、どれだけお前を待ってたか、分かる？ こんな気味悪いところで暮らしてさ、惨めにも程があるだろう！ 早くあの化け物を殺してよっ」

「落ち着いてください。それに、退治するかまだ決まったわけじゃありません」

「……は？」

髪の毛を振り乱して悲痛な叫び声を上げていた女は、旧介の声に動きを止めた。

信じられないというように、限界まで見開かれた目。

旧介は肩を掴む手を、できるだけ優しく払い落とした。

「退治してくれないの……？」

「いや、言い方が悪かった」

弱々しく震える声に、旧介は即座に返事を返した。

「……とりあえず、話の続きは室内でしませんか？こんなところで話すようなものでもないの」

旧介の言葉に、女はゆつくりと頷く。

無言で扉を開けたまま、小屋の中へ進む女の後に続く形で、旧介とメールも足を踏み入れた。

室内は予想以上に酷い有様だ。穴の空いた屋根から侵入するように木々が生え、床は歩くたびにぎしりと悲鳴をあげる。

もはや家と呼んでいいかも分からない状態である。

旧介の後ろを付いて歩くメールも、その光景には驚きを隠せなかったらしく、目を見開きそこらを見回している。口を手で覆っているのは、旧介の命令を忠実にこなしているからだろう。

女は旧介とメールに、椅子に座るように言ってから、自身も向かいに腰を下ろした。

少し時間が経ったことで落ち着きを取り戻したらしく、女は「さつきはごめん」と恥ずかしそうに呟いた。

「あたし、本当に嬉しくつてさ。これでこんなところからおさらばできると思つと、もう、なんか止まなくなつて」
「慣れてるので大丈夫ですよ」

少ないながらも、旧介は鬼退治を何度かしたことがある。その際、鬼憑きである依頼人たちは全員が冷静さを忘れていた。

彼らにとつて、旧介はようやく現れた救世主であるのだろう。だから必死で助けを求めるのだ。

助かりたい人間が依頼主になるのは、必然のことだろう。

「……そ、それで。鬼を退治しないかもってどういうこと？ 金はあるんだよ。約束は破らないさ」

「金銭の問題ではなく、僕の問題です」

「は？」

女が身を乗り出す勢いで、旧介を凝視する。強い視線から逃げることもなく、淡々と旧介は続けた。

「まずもって貴方を狙う鬼を見る必要があります。僕は今まで人を食べる鬼の退治しかしたことはありません。ですが、もし、貴方を狙う鬼が高い知能を持つとされる契約を誘うタイプであるなら、殺されるのは僕になるかもしれない」

「つ、つまり、お前が鬼に敵わないかもってこと？」

「まあ、そうですね。了承して頂いていますが、僕はジョーカーじゃない。ただの人間です。僕が勝てないと判断した場合、鬼退治を引き受けることはできません。意味ないですから」

「……そんな」

絶望に顔を青くさせた女を見ながら、旧介は沈黙していた。言わねばならないことは全て言った。

旧介は馬鹿ではない。勝てないと分かった相手に、わざわざ死ぬと分かりながらも戦いを挑むほど熱い性格もしていない。

だからこそその言葉である。

（まあ、今までの鬼退治は結構楽に倒せたんだけどなア。全部人喰いのやつで、契約したがるのじゃなかったからだろうけど）

女は顔を俯かせ、身体をがくがくと震わせていた。頼みの綱にもしかすれば見捨てられるかもしれない。考えたくもない可能性に、怯えているのだろう。

旧介は無表情に女が何か言つのを待っていた。

そして。

その女を見る者がもう一人居た。

メイルである。

メイルは口をしつかりと結んだまま、可笑しいものを見るような目で、女を見ていた。

その表情に悪意は無い。ただ純粹にどこまでも不思議で仕方がない。そんな顔である。

旧介は、メイルの僅かな変化に気付くことはなかった。

幸せな時間を堪能しています

「……分かった。それでもいい。ただできるだけ、鬼退治をしてほしいんだ。あたしはまだ死にたくない」

「了解しました」

女は暗い面持ちをしたまま、それでもしつかりとそう言った。

確かに、旧介とてできる限りのことはするつもりだ。今回の仕事をしなかった場合、当然ながら報酬も無しになる。それだけはどうしても避けたい、というのが本音であった。

依頼人の名前は、エミア・ロルドという。

エミアは何とか明るく振る舞おうとしているようで、口元に笑みを貼付けている。とはいえ、それは見ただけで作り物と分かるものであったが。

「あと、エミアさんは、どういう鬼に狙われているのかわかりますか？ 契約を勧めてきたとか、そういう感じで」

「……契約、なあ。あたしは勧められてないよ。鬼に襲われそうになったことはあるけど」

「そうですか」

情報があまりに少なすぎる。

それが何よりの問題であった。

契約をしたがる鬼であれ、人を食い殺す鬼であれ、見た目は全く変わらないし、どちらも人を襲う化け物であるのだ。

この時点では、エミアに憑いている鬼がどちらのタイプであるか、予想もできない。

「では、鬼について気付いたことはありませんか？何でもいいので」
「気付いたこと、なあ……」

椅子に深くもたれ掛かり、頭を掻きながら、エミリアは眉を歪めた。鬼を見た時のことを思い出しているのだろっ。あまり思い出したくはない記憶かもしれないが、如何せんヒントが少なすぎる。

ちらりと、隣で静かにしているメイルを見る。その視線に気付いたのか、メイルも旧介の方へ目を向けた。

僅かの時間、見つめ合うことになる。

メイルは唇を笑みの形に変えた。にこり。音にするなら、それだろうか。嬉しさを隠しきれずに、思わず溢れ出てしまった、そんな笑みであった。

「あ、そ、そういえば」

「何か思い出しましたか？」

エミリアの女性にしては低い声が鼓膜を揺らす。

メイルから顔を逸らし、旧介は頭を抱えている依頼主に向き直った。

「血まみれだったんだ、あ、あの鬼……」

「血まみれ、というと？」

「うまくはわかんないよ！でも、人を喰った後だったのかも……」

「……」
「ほっ」

違和感。

小さな違和感を抱きながら、あえて旧介はそれを口にはしなかった。

表情も一切変わらない。

無感情を装ったまま、旧介はポケットからメモ帳とボールペンを取り出した。

血まみれの鬼。

それだけを素早く書いてから、またエミアを見る。

「あと気付いたことは？」

「……もうないよ。あるかもしれないけどさ、頭がぐちゃぐちゃでうまく覚えてないんだ。思い出したらまた言うよ」

「分かりました」

メモ帳とボールペンをポケットにしまい込みながら、旧介は席から立ち上がる。それにつられ、メールも同様に席を立った。

「じゃあ、また明日のこの時間に来ますね」

「は?!」

何でもないことのようにさりと言つてのけた旧介に、驚いたのはエミアである。

当然だ。

人々に迫害を受け、こんな辺境の地に追いやられた。あまりに絶望的な状況の中、ようやく現れた救世主が、何もしないで帰ると言っているのだから。

むしろ、これで驚かずにいられる人間の方が希少だろう。

「何で帰るんだよ!……まさか、あたしの鬼はやっぱり倒せないってこと？」

「違いますよ。ただ」

「ただ？」

エミアが旧介に近寄り、間近で睨みつけるようにその顔を凝視する。

吐息がかかるほどの距離に、旧介は不愉快そうに目を細めた。それでもエミアは退こうとはしない。

旧介の腕を両手で握りしめ、後退することさえ許そうとはしなかった。

「香宮司くん……」

その傍で、メールが不安げに二人を見ている。

そして、いつの間にか、メールは旧介のジャージの裾を握っていた。

状況を知らない人間がその場面を見れば、二人の女が、無駄に背の高い男を取り合っているようにしか見えないだろう。

しかし、事態はそれ程軽いものではない。

そして。

膠着した状況を始めに抜けたのは、旧介であった。

ハアとわざとらしいため息を落としてから、目前で、親の仇でも見るかのような顔をしているエミアを見下ろす。

「宿」

「やど？」

短い単語に、エミアが首を傾げた。

そのせいで、また余計に狭まる距離に旧介が口を曲げる。

「近い」

「え、あ、あつ」

瞬間、エミアが旧介を容赦なく突き飛ばした。

受け身も何もしていない状態であつたために、旧介はぐらりと後方に倒れそうになる。

しかし、それを見たメールが驚くべき早さで、旧介をがしりと抱き留めた。

自身より30cmは大きい男を、しかも少女が抱き留めるのはなかなか困難なものだろう。それでも、メールは旧介に回した手を離そうとはせず、その小さな身体で必死に踏ん張った。

「うぐっ」

人形のように身を任せていた旧介も、ボロボロの床に足を留め、体勢を取り直す。

その顔は、隠す気もないのか、たいそう不満げに歪められている。それを見て、顔を真っ赤にさせながらも、エミアはすぐに口を開いた。

「ごごごめん！ あたし、なんか白熱しちゃうと無意識に近付いやう癖があるんだっ」

「いいですけどね」

全くだとは思っていない、刺々しい口調で言い返す旧介に、エミアは顔を青くさせた。

「本当にごめん。あ、あんまりに近くて、自分でもびっくりしちゃって」

「へえ」

「そ、そういえばさ！ やどってどういうこと？」

気まずい雰囲気になれず、エミアが話題を変える。

だが、旧介もそれに乗らない程、苛立つたわけでもなく、「ああ」と頷いた。

「宿借りてるんですよ、町で。だから帰らないといけなくて」

本当は宿のサービスで付いている晩御飯を食べただけなのだが、当然ながらそれは言わない。

（タダだし。美味しい。食わないとあまりに損すぎるだろ）

しかし、そんな雰囲気はおくびにも出さず、旧介はあたかも宿に帰る必要があるという態度を取っている。

「え、でも、じゃ、じゃあ……今晚あたし一人？」

「嫌でしたらまた夜に来ますよ」

「や、やっぱり」

エミアは言いにくそうに口を引き結んでから、旧介を上目遣いに見つめた。

また、違和感。

「この小屋に今日は泊まってくれよ！」

「……は？」

予想もしていなかった言葉に、旧介の目が僅かばかりに見開かれる。

だが、エミアはそんな旧介にも気付かず、妙案を思い付いたというように腕を組んだ。

「そうだよ！ だったら、いつ鬼が出てても倒して貰えるし」

「いや、まだ鬼退治をするとは言っていないですよ」
「じゃあ鬼をそこで見極めればいいじゃないか！　我ながらいい案だよ」

（いい案だよ、じゃねえよ。最悪な案だよ）

百歩譲って、ここに泊まることにする。

その場合のメリットは、鬼退治がしやすい。

そしてデメリットは、宿の美味しい食事を諦めねばならない。また、言っては悪いが、こんな古びた薄汚い小屋で寝る必要がある。どう考えても、確実にデメリットの方が多すぎる。

「待つてください。やっぱり駄目です」

「え？　なんで？」

「宿に帰らないといけない気がしますから」

「報酬アップさせるから！」

報酬。

その単語が耳に入るやいなや、旧介はエミアに微笑みかけた。

「そうですね。危険ですし、ここに泊まらせて頂きましょうか」

「お前、現金な奴だね！　そういうところ素敵だと思っわ」

エミアが面白そうに口にした感想も、旧介には聞こえていない。金を貰えるならば、だいたいの仕事はやる。それは旧介の中での絶対であつた。

「……と、言いましたか」

「お前さ、敬語やめてよ。なんかすごい嫌だ」

エミアの言葉にも、旧介は反抗する気さえ起きない。
金。その単語で旧介の頭は埋め尽くされているからだ。

「と、言ったが。どこに泊まるんだ？ 二人も寝ることができそうなスペースは見受けられねえけど」

「ああ。それは、あっちの部屋にあるんだよ」

今まで気付かなかったが、エミアの指した方向には一つの扉があった。

エミアが扉を開くと、中はお世辞にも広いとは言えないが、寝ることはできるだろうスペースがある。窓が一つもないことから、物置か何かなのかもしれない。

とはいえ、これでは一人しか寝ることはできないだろう。

「あと一人はどこに寝るんだ？」

「え？ 二人で寝て貰うよ？」

「は？」

信じられない言葉に、思わず耳を疑う。隣に立つエミアを見れば、何が可笑しいのか分からないといった顔をしている。

確かに空間を詰めて寝れば、二人ならぎりぎり寝転べるだろう。

しかし、旧介の言いたいことはそういうことではない。

旧介の反応に、エミアがはっと顔を赤らめた。そして旧介の背中を遠慮なくしばしと叩く。

「分かった分かった！ お前が女の子を襲っちゃいそうってことね。一日くらい我慢しなさいよ！」

「違う」

そして、旧介はあえて無視していた、その存在を振り向いた。

さきほど、旧介が突き飛ばされた時に勇敢にも抱き留めたその少女は、変わらずにそこに居る。

つまり、まだ旧介を抱きしめているのだ。

背中から腹に腕を回し、あまりに力強く抱き着いているメイルを見る。

幸せそうな顔をしていた。

「何が違うのさ」

「……だから」

旧介はメイルからエミアに視線を移す。

「襲われる可能性があるなら、コイツじゃなくて僕だ」

「はあ？」

小さな声で吐き出した悲痛な告白に、エミアは眉を歪めた。

「……鬼の前に、ストーカー退治つつうことか」

背中に幸福そうなメイルをくっつけたまま、旧介は憂鬱と吐き出した。

私の世界はこれからずっと

最終的に、旧介とメールは同室で眠ることになった。

どれだけ駄々をこねようが、小屋は小屋でしかないのだ。
寝るための部屋を増やそうにも、その方法が無いのである。

仕方がない。仕方がないことだ。

夜中にどうやって自身を守ろうか考えつつ、旧介は腹に手をやった。

小屋の罅^{ひび}が入った窓から外を眺めれば、もうそろそろ日が暮れそううだ。

椅子にもたれ掛かりながら、室内に目を動かせば、メールとエミ
アの背中が視界に入る。

晩御飯の支度をしているのだ。

（まあ、こんな森で食う飯だし、あんまり期待はしないけど）

エミは鬼憑きだ。

人間たちの迫害から逃げるために、こんな辺鄙な場所に小屋を立てて暮らしている。

当然ながら、町で買い物をすることもできないだろう。

つまり、エミは完全なる自給自足をしていることになる。もしくは、家族や親族にこっそり食料を送ってもらっているか。そのどちらかだろう。

どちらであれ、上等な食材を持っているとは考えにくい。

（……そういやア、メールは料理できんのか？）

旧介がメールに対して持っている情報は限りなく0に近い。料理が上手いのか下手なのかも未知の世界であるのだ。

（見てる分には、苦勞してねえみたいだけど）

それどころか、たどたどしい手つきで包丁を持つエミアを、うまくカバーしているようにも見える。

揺れる橙色と茶色の頭をぼんやり眺めつつ、旧介はジャージのポケットからメモ帳とペンを掴み出した。

（今回の鬼退治は、ちと面倒臭そうな感じがすんなア）

ペンでメモ帳に書き足して行きながら、旧介は自身の長い髪を弄り回していた。

机に並ぶのは、具の無いカレーライスである。

ルーと米だけのシンプルなそれを見た時、旧介は少しばかり驚かすにはいらなかった。

もつと簡素で、地味なものが出てくるとばかり思っていたのだ。

具が無いとはいえ、カレーライスが出てくるとは、到底思っていなかった。

「……美味そうだな」

素直にそう思った。

もとより空腹であったのだ。匂いの強いカレーライスが出てくれば、誰だってそう思ってしまうだろう。

「ほ、本当か？ あたしいろいろ失敗しちゃって。ほとんどメールが作ったんだよ、それ」

「そんなことないですよ！ エミアさんもお上手だったじゃないですか」

いつの間にか、名前で呼び合う仲になった二人のやり取りを見ながら、旧介は感心していた。

（確かに、後ろから見た時もメールがよく動いてたな。コイツ、料理できんのか。ストーカーってだけじゃねえんだなア）

初めてメールの評価できる点を見つけたように思えた。木製のスプーンで一口食べてみる。なぜ甘口であるかには触れないとして、普通に美味いカレーだった。

これで具が入っていれば文句なしなのだが。しかし、わざわざそれを言うのも野暮というものだろう。

旧介はカレーを口に運び続けた。

「香宮司くん、お、美味しい……？」

不安げな声に顔を上げれば、眉を下げてこちらを伺うメールと目が合った。

気にしていない振りをしているが、エミアも気になっているようで、聞き耳をたてているのが分かる。

「美味しいな。これなら毎日食いたい」

そう言った瞬間、メールの顔が一気に赤くなる。

「毎日って毎日、え」と意味の分からない言葉を繰り返すメールを一瞥し、旧介はまた食事を再開した。

混乱するメイルの隣では、エミアが必死で笑いを押し殺そうとしている。

（何でそこで照れるのかね。コイツはやっぱ分かんねえなあ）

プロポーズのような言葉を言った張本人は、その意味を全く理解していなかった。

「何かあつたらすぐに声を出せ。鬼を刺激するなよ。鬼が出たら僕のところにすぐに来い。いいな？」

「分かつてるよ。すぐに行くさ」

夜。

旧介とメイルが眠る部屋と少しばかり離れたところで、エミアは寝ることになっている。

鬼憑きであるエミアを一人にしているものか悩んだが、それ程に距離があるわけでもないことに加え、エミア自身が一人でいいと主張したため、こういう配置になったのだ。

とはいえ、不安なものは不安である。

エミアが鬼に食われたとしても、間違えて契約してしまったとしても、その時点で報酬は無くなるのだ。

それは何より避けなければいけない未来である。

真剣な顔をしてエミアを心配する旧介に、エミアは顔を僅かに赤らめながら「大丈夫だってば」と明るく笑った。

「あたし一人じゃないと、何か物音とかで寝れないタイプなんだよ。それに近いし、そんなに考えなくったって大丈夫さ」

「……なら、いいんだけどな。いいか。本当に、何かあったらすぐに来い」

エミアの紅茶色をした目をじっと見つめたまま、何度も言った言葉を再び繰り返す。

大事な依頼人であり、金の源であるエミアには、何があっても無事でいてもらう必要がある。

エミアはもう一度「大丈夫だって」と呟き、自身の寢床に向けて歩きだす。

「……でも、心配してくれてありがとな」

小さなその声は旧介に届かなかった。

エミアの後ろ姿を見送っていると、背後から鈴を鳴らしたような声が聞こえてくる。

「香宮司^{こうぐさ}くん、布団敷けたよー」

「ん？ ああ」

返事をしながら、声の方へと振り向いた。

薄っぺらく、かび臭い布団が室内にキツキツに敷き詰められている。

その詰まった臭いに眉をしかめながら旧介は、メールの座る布団の向かいに腰を下ろした。

「お前、襲^{おそ}うなよ」

「襲^{おそ}う……って、え、えっ」

忠告としてそう言ったのだが、メールは思いもよらない言葉に目を見開いて、またもや顔を赤くさせていた。

（あ、余計な心配だったか）

さすがに、それ程馬鹿ではなかったらしい。

口を手の平で覆っているメールを見て、いらぬ杞憂を抱いていたことを知り、安堵の息を落とす。

「そ、それって」

「あ？」

話をしつつ、旧介はかび臭い布団に潜り込んだ。

湿っている。日干しをしていなかったのかもしれない。最悪だ。

メールも旧介に倣い、布団の中に身体を入れている。

「まさか、あの、お、おお誘いでしたっ」

「違うけど」

「ですよねえ！」

えへへと、脱力しそうな笑い声をあげるメールを見る。顔どころか耳まで赤くしていた。

もしかすると、あの独特な笑い方は、恥ずかしさを隠すためにしているのかもしれない。

メールに羞恥心が残っていたことに安心感を覚えながら、旧介は口を開いた。

「そういえばさ」

「は、はいっ。何でしょう」

「お前が言おうとしてた、僕を好きになった切っ掛けって何だったんだ？」

「え」

瞬間、メールの動きが止まる。
だが、旧介は言い逃れることを許しはしなかった。
深い橙色をした目を見つめる。
またメールの肌が赤くなった気がした。

「あ、ああ、あの、明日とかは」

「言え」

「でも」

「メール」

「は、はい」

旧介の赤い目が音もなく細められる。

「言え」

言う以外に、選択肢は無い。

旧介の赤い目を見ながら、メールはひしひしとそれを感じていた。

「……わ、私」

「ああ」

ぼふりとメールが頭から布団に潜り込む。湿っぽいそれに頭を突っ込むなんて、よくできたものだと思心しながら、旧介は言葉の続きを静かに待った。

睡魔が足を引っ張るのを感じる。トンネルと森林と、今日はひたすら歩き続けたのだ。疲労も溜まっている。

「香宮司^{かみやうじ}くん^{くん}に会ったことがあるんです」
「そうか」

やはりと納得しながら、旧介はゆつくりと瞼を下ろした。
暗闇に染まる世界は、やけに居心地が良い。

「……昔の私は、生きる意味を持っていませんでした。いつ死んでもいいような、そんな存在だったんです」

瞼の裏に、ある情景が浮かび上がる。

『彼女』を失って、世界が死んだ旧介がそこに居た。
その時、旧介はいつもこう思っていた。

「毎日、私はきつと世界にいない存在なんだって、絶望していました」

そう思わずにはいらなかったのだ。旧介にとって『彼女』はまさしく全てだった。希望も喜びも怒りも悲しみも、『彼女』は奪っていた。

ただ、有り余る憎悪と殺意だけを残していったのだ。

「でも、そんな私を、香宮司^{カミヤウジ}くんが見つけてくれました」

そんな日が続く中、旧介はある少女を見つけた。

路地裏の狭い隙間に入り込んだそれは、まるで死体のようだった。

「私は食べる物も何も持っていませんでした。私は、奴隷でした。でもそれが嫌で脱走して、一人になりました。誰も汚い私に見向きもしませんでした」

橙色をした目は何も映してはおらず、からっぽだった。

世界に絶望し、生きる屍と化した少女に、旧介は無性に苛立ちを

覚えていた。

「でも、香宮司^{こうくうじ}くんだけは違った」

旧介の全てである『彼女』は消えた。消えてしまった。

だが、この少女はどうだろう。まだ希望も何もあるように、旧介にはそう見えた。

あえてそれから目を逸らしているのだと思った。
むかついた。

「私に声をかけてくれた」

お前、何してんの。

汚い恰好しやがって、邪魔なんだよ。

旧介の言葉に優しさなど無かった。どこまでも辛辣なそれに、少女は不思議そうに首を傾げた。

「私に希望をくれた」

少女の腕を乱暴に掴み、旧介は店の中に連れ込んだ。

適当にこいつの服と、なんか食い物持ってこい。

旧介は店員にそう言った。

「私の頭を撫でてくれた」

綺麗な姿になった少女の頭を、旧介はぐしゃぐしゃと撫でた。風

呂に入っていないため、髪から頭垢^{ふけ}が落ちた。

それに旧介は小さく笑った。

「私に」

それから店員に、旧介はありったけの金を渡した。

このガキに働くところをやれ。衣食住がしっかりしてるところがいい。店員は困惑したが、金を見て口を閉じた。

旧介は少女を見た。

「生きる意味をくれた」

お前、僕の何より大切だった人に似てるな。

旧介はそれだけを言った。

「私の世界は香宮司^{カミヤウジ}くんなんです」

メイルの澄んだ声が鼓膜を揺らす。

確かに、そんなこともあった気がする。あの時から旧介の懐はとも寂しくなった。

（それが……）

メイルの方を見れば、いつの間にか布団から顔を出して、メイルもこちらを見ていた。

「私の世界は、あの日からずっと香宮司^{カミヤウジ}くんだけです」

その姿は、『彼女』を心酔する旧介にとてもよく似ていた。

いや、心酔などという軽いものではない。これは依存だ。

旧介はゆっくりと口を開いた。

その瞬間だった。

甲高い悲鳴が部屋を満たす。それはエミリアの声であった。

どうしても違和感ばかり

エミリアには何かあればすぐにこちらに走ってくるよう伝えていた。にも関わらず、悲鳴だけで、エミリアの姿が見えない。

「……っ、最悪だな」

後悔をしたところで、遅すぎる。

旧介は布団から飛び出し、持って来ていた鞆を乱暴に掴み、エミリアの寝ている部屋に一目散に走り出した。

メイルも旧介に付いていく。

もともと、エミリアと旧介達が寝ていた場所は遠くない。いや、むしろ近すぎるくらいなのだ。

それも当たり前だろう。

小屋の中で寝ていたということは、三人とも同じ条件なのだから。距離などあつて無いようなものである。

時間にして、三十秒。

旧介は扉を壊すように勢いよく開いた。

「エミリア！」

返事は無かった。

森の夜は想像以上に暗く、月明かりも木々に遮られ、ほぼ入らないといっている。

こんな森の奥に建てられた、家とも呼べない小屋に、当然ながら電気が引かれているわけもない。

エミリアの部屋は真っ暗だった。だが、返事が無いことから考えて、ここに居ないのか。

もしくは。

(……返事もできないくらいに、怪我をしているか、か)

目を凝らし、耳を澄ませる。

室内に人影らしきものは無い。しかし、先程の悲鳴は確かにこの部屋の方から聞こえてきていた。

室内に足を踏み入れる。

静寂。

「エミア、どこだ？」

呼びかけにも、答える声は無い。それが指し示す答えはただ一つしかなかった。

エミアはここに居ない。

だが、おかしい。エミアを襲った何かがいるとすれば、それは鬼以外にいないはずだ。

鬼が、わざわざ人間を攫^{さら}うなんて面倒臭いことをするだろうか。

(するわけがない)

今まで旧介が見てきた鬼はそんなことしなかった。

人喰いの鬼なら、そんなことはしないのだ。なら、エミアを狙っていたのは、あと一つしかない。

契約の鬼だ。

「……………」

「香宮司くんっ、そ、外に！」

「外？」

メイルの焦った声に、窓から外を見る。
森に広がる暗闇の中、それは居た。

「……あれは」

そこには影があつた。

真っ黒で、人より一回りほど大きいその姿は、あまりに異質である。

体中に包帯のようなものがぐるぐると巻き付けられ、雫の絵が書かれた面を付けた姿には、見覚えがあつた。

肌は黒く、周りの暗闇と同調している。ただ、羽織っている白い着物だけが、その姿を際立たせていた。

お面を付けたミイラ男が、死装束を着ているような、あまりに珍妙な姿。

鬼だ。

「まじで現れやがって……」

旧介は、鞆からすらりとした細長い太刀を取り出した。
鞘に手をかけつつ、窓から外に出る。

「メイル。お前はここで隠れてろ」

「いんぐわい香宮司くん……」

「いいな？」

メイルは不安そうに瞳を揺らしながらも、小さく頷いた。
本当は旧介に付いていきたいのだろう。

だが、メイルは知っていた。

自身がどれ程に非力であるかを、よく知り尽くしてしまっている。
たとえ、旧介に付いていったところで、邪魔にしかないと分

かっていた。

だからこそその答えに、旧介は満足げに小さく微笑んだ。

(……さて)

走る。

できるだけ音を立てず、呼吸も隠し、木々の影に身を寄せながら、旧介は鬼に近付いていく。

鬼は旧介に気付いていない。

まだ、気付いていない。

風も無いじめじめとした森で、気配を隠しきるのは困難を極める。ゆっくりと、静かに、距離を狭めていく。

鬼はこちらを見ていない。

できることなら、戦いたくはなかった。どこかに消え去ってくれるのが一番有り難いが、そう簡単に事は進まないだろう。近付くにつれ、鼻を刺激する腐臭に旧介は眉を歪めた。肉を何年間も放置していたような、嘔吐を誘う臭いだ。それは鬼の特徴の一つでもある。

鬼の背後にある大木に身体を潜め、その姿を窺^{うかが}う。

鬼はぼうつと、ぬかるんだ地面の上に立ち尽くしていた。その着物には、ところどころ赤い染みができている。

(血まみれの鬼……あいつか)

エミアの言っていたことが正しければ、あの鬼こそ、エミアを狙っている鬼であるのだろう。

鬼は動かない。

木々に遮られ、見える筈のない夜空を見上げている。その鬼の先を見て、旧介は目を見開く。

エミアが、いた。

意識を失っているらしく、鬼を目前にしてもピクリとさえ動かない。その身体は血まみれだった。

（早く助けねえと、やばいな）

かといって、がむしゃらに突っ込んで行っただけでは無駄死にする羽目になるだろう。

とりあえず、エミアから鬼を離さなければいけない。あまりに距離が近すぎる。

旧介は周りを見回し、落ちていた石を拾い上げた。失敗は許されない。

（……よし）

木々の影に隠れながら、走り出す。目指すはエミアのいる木だ。中間あたりの距離にかかった時、旧介は持っていた石を投げた。カッン。大木に当たったらしい石は、そんな音を響かせた。瞬間である。

鬼が動いた。速い。音源の木にまで鬼が走っていく。あまり時間はない。

「エミア」

気絶したエミアを抱き抱え、声をかける。血に身体を染めている割に、目立った怪我はない。

違和感。

だが、長い間考えているわけにもいかない。

旧介はエミアを肩に担ぎ、小屋に足を向けた。とりあえず、メイルに怪我の治療をしてもらう必要がある。

少し走れば、すぐに小屋にたどり着く。
窓を開き、メイルにエミアを乱雑に預ける。

「え、エミアさん？。ただ大丈夫ですか」

「気絶してる。外傷は無いように見えるけど、一応診てやれ」

「わ、分かりました！」

顔を真つ青にさせ、メイルは自身より長身のエミアを何とか引きずって行く。

それを見届け、旧介は鬼がどこにいるかを探ろうと振り返った。

そして、動きが止まる。

ゆらゆらと蝋燭の火が揺れるように、不安定な闇を晒し、それは静かに立っていた。

鬼だ。

いつの間にここに来ていたのか。音も気配も何もしなかった。
振り向くまで、旧介は鬼が後ろに居ることを全く知らなかったのだ。

「……よオ、そんなにエミアと契約してえのか？　ちよつとしつこすぎるだろうよ」

当然ながら、返事はない。

鬼は、ゆらゆらと不気味に体を震わせているだけだ。

旧介は鞘を抜き去り、地面に放り投げ、刀を両手で構えた。刀が得意というわけではない。ただ、この場合、刀しか使えない理由があるのだ。

踏み込む。

それと同時に、鞘を足で蹴り上げた。

鬼を目掛け、飛んでいく鞘に隠れるようにして、旧介も走る。

鬼は何でも無いことのように、柳のような手で鞘を受け止めた。

「駄目だろ」

受け止めた瞬間、鬼は奇声を発し、鞘から急いで手を離す。
だが、遅い。

バラバラとその指が崩壊していく。
暴れる鬼に旧介は飛び込んだ。

「鬼さんこちら」

刀で思いつきり、その身体を切り付ける。
じわりとその傷から焦げた臭いが広がり、また崩壊が始まってい
く。

「手の鳴る方へ」

鼓膜を突き刺すような悍^{おそ}ましい音に、旧介は眉を歪めながら、鬼
の傷に手をつ突っ込んだ。
決る。

絶叫が森に響き渡る。

瞬間、鬼のもう片方の手が旧介の頭目掛けて振り下ろされた。

「まだだろオが」

冷酷な声と共に、旧介が片手を振った。
何かが転がっていく。
腕だった。

鬼の腕が、切り落とされていた。

「痛い？」

悲鳴。

旧介の顔には、何の感情も無かった。無感情に鬼を虐殺しているのだ。

「痛くない？」

崩壊し始めた両手と胴体に、鬼は吠えた。

そして、腹に旧介の手が埋まっているにも関わらず、突進する。恐ろしい力だ。

足を踏ん張るものの、敵わずに旧介は後ろに飛ばされた。体勢を崩すような失敗は犯さず、ぬかるんだ地面に剣を突き刺し、何とか堪える。

「馬鹿力かよ」

風を感じた。

目前まで鬼の手が迫っている。それは崩壊も何もしてはいなかった。

あまりのスピードに受け止めることもできず、旧介は横に向かって転ぶように避けた。

湿った土が体中を濡らす。

だが、そんなことに構っていられる暇などない。

刀を持ち、鬼を見据える。

「……あ？」

そこに鬼はいなかった。

周りを見渡す。どこにもあの黒い姿は見えない。

消えたのか、はたまた、隠れて隙を窺っているのか。
気付けば、旧介の息は荒れていた。

「……どこに行った」

逃げたのだろうか。何故、逃げる必要がある？

旧介と戦っていて、確かに不利にはなっていた。だが、それだけだ。

あの突進力と、傷が消えていた手。

力押しをしていたならば、状況など簡単に変わっていただろう。

それは鬼にも分かっているはずだ。知能の高い、契約の鬼ならば余計に。

（なんだこれは）

また、違和感。

どういうことだ。ここに来てから、おかしいことばかりが重なっている。

まるで何かのヒントのように、欠片だけがばらまかれているのだ。

ぞわりと。

刀を首に突き付けられたような、恐怖が旧介を襲った。

息ができなくなる。

圧倒的な敵を目前にしたような、あまりに冷たい恐ろしさ。

「香宮司くん！ エミアさんの治療が済みましたよ」

メールの声が響く。

その瞬間、今まで感じていた恐怖感がすっと消え去った。

声のした方向を振り返れば、エミアに肩を貸したメールが、こち

らに歩んでいる。

（なんだ、さっきのアレは）

あの鬼と対峙した時でさえ、あれほどの恐怖は感じなかった。
何かがある。

違和感が積み重なっていくのを感じながら、旧介は頭上を見上げた。

やはり夜空など見えない、ただの闇がそこに広がっている。

そして正解です！

とにかく森の暗闇の中、呆然と立ち尽くしているわけにもいかず、旧介達はまた小屋に戻っていた。

エミアは依然として意識を戻さない。先程のようにバラバラでいるわけにもいかなかったため、今は同じ部屋で寝かせている。

いつあの鬼が再びやって来るか分からない。確かに、旧介は鬼に重傷を負わせたが、それを理由にこのまま引き下がってくれるわけも無いのだ。そのくらいで諦めるようなら、鬼は化け物などと呼ばれはしない。

（さて、どうするか……）

そして、何より気になっているのが、先程感じたあの威圧感である。戦わずとも分かってしまう。あれを出した奴は相当に強い。だが、その『奴』がいったい何であるのか、旧介には全く分からなかった。

エミアを狙った血まみれの鬼ではない。あの鬼からはそれ程の威圧感を感じられなかった。

だが、そうであるなら、『奴』はいったい何だ？ 敵ではあるのだろうか。味方ならば、旧介を威圧する意味が無い。

（くそ、おかしいことばかりじゃねえか）

違和感。

ここに来てから、いったい何度その感覚に捕われただろう。原因も理由も何もかもが不透明な中、それだけが異常なまでに目立っているのだ。

どこからおかしいか。それを考え直さなければならぬだろう。
旧介の表情は変わらない。だが、その赤い目だけが旧介の焦りを表すように、小さく揺れていた。

「香宮司くん、大丈夫ですか……？」

不安げな高い声に、ゆるりと顔を上げれば、眉を垂れ下げたメルと目が合った。橙色をした大きな目はこんな時でさえ深く、そして綺麗な色をしている。

心配そうなメールの顔を見て、旧介は苦く笑った。感情を堪えるのは何より得意であったのだが、どうやらそれも下手になってきているらしい。

もしくは、メールがやけに人の感情に鋭いのか。

どちらでも構わない。焦りを悟られたのは、事実であるのだから。

「大丈夫だ。さっきの鬼が怠かっただけで」

「……そうですね！香宮司くんなら大丈夫ですよ。いらぬ心配でした」

「全くな」

気を使わせている。

それが分かった。メールは旧介の焦りに気付いたのだ。だからこそ、旧介の言葉はただの見栄であると分かった筈である。それをあえて鵜呑みにした。

これはメールの優しさだ。

（……それだけだろ）

メールとの過去を思い出す。

確かに、旧介は孤独なメールを救った。しかし、それだけで旧介

のために死んでもいいなどと思うだろうか。

あの時メールに服と居場所をやったのは、ただの気まぐれでしかない。言い換えるならば、あそこに居たのがメールでなくとも、旧介は同じ行動をしていたのだ。

どうでもいい、小さな事でしかない。事実、旧介はメールに言われるまでその過去を綺麗に忘れていたのだ。

だからこそ、やはり、メールが理解できない。

「……って、お前」

「はい？」

ティーカップを両手で持ち、旧介の口に近付けていたメールの動きが止まる。湯気が頬を熱くするのを感じながら、旧介は幸せそうな顔をした少女を見つめた。

「何してんの……？」

低い声だった。

地を揺るがすような怒りが籠められた、冷たい声にも、メールは笑顔を絶やさない。

「喉渴いたかなと思ったので」

「思ったのでじゃなくて、何でお前が飲ませようとしてんの？」

「え、そ、それは……」

メールが顔を赤らめ、恥ずかしそうに目を下に伏せた。

どうしてそこで赤面するのか、旧介には全く理解不能である。

わざとらしくちらりとこちらを一瞥した後、メールは小さな声で呟いた。

「香宮司くん猫舌だから、冷ましてから飲む方がいいかなと思って……」

「猫舌を知ってるのはいい。いいとして、それでどうして飲ませる方向に転換した？ 普通に渡せよ。それに」

旧介はメールからティーカップを取り上げ、中に入った紅茶を見る。

「勝手にエミアの家の子葉使うなよ。こんな小屋に住んでんだ、食料だって少ししかねえだろうに」

「……え？」

エミアは鬼憑きなのだ。一般人のように、簡単に買い物をすることもできない。

それはメールも知っているだろう。そう思い注意した旧介の言葉に、しかしメールは頷かなかった。それどころか、旧介が何を言っているか理解できないというように、疑問の声を上げる。

その反応に、旧介はまたあの感覚を覚えた。違和感。

「……だから、エミアの家に食料は」

「ありましたよ？ いっぱい。エミアさんに勝手に使っていていいとも言われました」

「……いっぱい？ 食料が？」

「はい」

何故、鬼憑きであるエミアの家に食料がある？

エミアは町の人間から迫害を受け、この小屋に逃げてきたのだ。だからこそ、町に買い物に行くこともできない。

（……それは、本当か？）

なら、どうしていきなり泊まることになった旧介とメールの分の食事まで、用意することができたのだろうか。

それ以前に、カレーライスを作ることなど可能だろうか。買い物にも行けず、森ではそばそと暮らしているにも関わらず、だ。嫌な予感がした。

「……あのカレー、具が無かったよな」

唐突な言葉にメールは小さく首を傾げ、それから可笑しそうに笑った。

「いえ、あれは……エミアさんがじゃがいもとかを小さく切ってたから、ルーの中で溶けちゃったんですよ。みじん切りみたいになってたので」

どうして、カレーライスを作ることができたのか。それに加え、何故野菜まであったのか。

貧しい筈の家に、それだけの蓄えがあるだろうか。あったとして、わざわざ旧介とメールのために、使ったりするものだろうか。

使っわけがない。

使っわけが、ないのだ。

（いや。それより前から違和感があったじゃねえか）

旧介が宿に戻ると言ったとき、エミアは必死になってそれを止めた。鬼が怖かったのかもしれない。しかし、また戻ってくると言った時でさえ、エミアは耳を貸そうとはしなかった。

（何でだ）

また、エミアが近寄った時、旧介は眉を歪めずにはいらなかった。あれはエミアがあまりに近すぎたということもある。

しかし。

しかし、それ以上に気になることがあった。気のせいだと思い、特に意識してはいなかったが。

エミアから微かに血の臭いがしたのだ。

あまりにも微かなものであり、また、エミアが包丁を使いこなせていないのを見てから、単に指を切っただけかと思っていた。

(……何でだ、だと?)

わざわざ小屋に旧介達を泊めたというのに、エミアは頑なとして一人で寝ることを選んだ。鬼に怯えていたのならば、無理にでも三人で寝ようとするものだろう。

矛盾。

(おかしかったのはどこから、か)

血まみれであつたにも関わらず、エミアには目立つ外傷もなかった。

ならば、あれは誰の血だ。

(……躍らされていたのは、どっちだ)

「そういえば」

メイルの声に顔を上げる。

ぞわりぞわりと背中になにか冷たいものがはい上がってくるような、得体の知れない気持ち悪さを感じながら、旧介は黙っていた。

「香宮司くん、気になることがあれば、二人の時に言うように言ってくれましたよね？」

「……ああ。何だ？ 何か気になることがあったか」

「小さなことなんですが」

そう前置きをしてから、メイルは指を顎の下に置いた。数秒、考え込むような仕種をした後、旧介を見直す。

「……笑ってたんです」

「笑っ、て……？」

「は、はい。エミアさんが」

じわり、と。

積み重なった違和感が、背中に覆いかぶさるような、奇妙な重さを感じる。それは、旧介の中にだんだんと侵入し、毒のように全てを壊していく。

「香宮司くんが、鬼を退治できるか分からないって言ったとき、顔を俯かせてたじゃないですか」

「ああ」

そうだ。

エミアは肩を震わせ、顔を下げていた。鬼を退治できるか分からないことを知り、絶望感に苛まれていたのだと。そう、旧介は思っていた。

だが、そうでないとするならば。

「笑ってました。耐え切れないという感じで肩まで震わせて。あれって思ってたんですが、香宮司くんは気付いてなかったと思って」

メールは人の感情に機敏だ。だからこそ、気付いたのやもしれない。

（ああ……でも、そうか。そういうことか）

どこからおかしかったのか。簡単だ、最初から全てがおかしかったのだ。

旧介は笑っていた。笑わずにはいられなかったのである。何故気付かなかったのだろう。少し注意して見ていれば、あまりにも分かりやすく答えは落ちていたというのに。

「もう少し、疑心暗鬼になるべきかなア」

あの、威圧感。

旧介に恐怖を覚えさせた、圧倒的な威圧感はメールの声と共に消え去った。

そして、そこにはメールに肩を借りたエミアが居たのだ。

「なあ、メール」

「はい」

旧介は静かに椅子から立ち上がり、鬼切りの刀を握り締めた。それに倣い、メールも素早く足を伸ばす。

「どんな風に笑ってた？」

「へ？」

「エミアはどんな風に笑ってたんだ？」

そして、旧介はゆっくりと振り返る。そこには布団で寝ているエ

ミアがいた。

「……馬鹿にした、感じの。そういう笑い方でした」

いや、寝ているのではない。寝ている振りをした、ミアがいるのだ。

(そりゃア、馬鹿にもするさ)

「なあ、ミア」

旧介の声に、ミアは瞼を開いた。紅茶色をした美しい瞳が天井を見つめてから、旧介たちを映し出す。

そして、ミアは笑った。

今まで必死に我慢していたものが、ようやく解放されたように、大きく高らかに笑い声を上げる。

それに釣られ、旧介も笑った。嘲笑である。

「ミア、か。いや、違う。違うよな。ミアだったんだ」

いまだ狂ったように笑い続けるミアを、無感情に一瞥し、旧介は口を開いた。

「なあ、鬼サン」

それが違和感の正体であった。

ふざけた鬼ごっこ始めます

高らかな笑い声が、小屋の中を支配する。それは今まで旧介たちが聞いていたエミアのものとは何ら変わり無い。

笑いすぎて息切れを起こしながら、エミアはゆっくりと時間をかけて布団から立ち上がった。茶色をした長い髪がさらさらと揺れている。

「ああ、もう、駄目だよ。面白すぎるんじゃないの。アタシを笑い死にさせようとか思ってたわけ？ いや、そんなこと思ってたわけないよね。必死でアタシを守ろうとしてたんだし。ああああ、もう！ アタシがばらまいてったヒントにいつ気付くかなってドキドキしてたんだけど、なかなか気付いてくれないから、さあ。今まで笑い堪えるの大変だったんだよ」

つらつらと堰を失ったように、どこまでも楽しげな声音でエミアは言った。紅茶色をした瞳は、獲物を前にした肉食獣のようにぎらぎらと煌めいている。

旧介は気付かれないように、ちらりと窓と扉を盗み見た。窓はちょうどエミアの背後にあり、扉は旧介から一メートルほどの場所にある。

逃げるか、否か。

逃げることを選択したとして、エミアがそうやすやすと旧介とメイルを逃してくれるだろうか。

答えはノーだ。逃がしてくれるわけがない。でなければ、こんな無駄に手の込んだ事をする必要性が無いのだ。

エミアは旧介たちを殺す気なのだろう。

「……あの鬼は」

「んん？」

「あの鬼とエミア、お前は血まみれだったな。あれは誰の血だ？」

「ああ、あれね」

唐突な話題転換が、ただの時間稼ぎだということは、エミアにも分かってしまっただろう。それを証拠付けするように、エミアは余裕たっぷりに微笑んだ。こちらの思惑など全てお見通しだともいいかげな、勝ち誇った顔だった。それでも、エミアがあえて旧介の言葉に乗ったのは、単なる気まぐれ以外の何物でもないのだろう。

状況は最悪だった。

あの時感じた威圧感は、確実にエミアのものだ。あれほどの恐怖感に苛まれたということは、エミアは相当の力を持っていることになる。

旧介には分かっていた。どう足掻こうが、エミアには勝つことはできないと。

「あれは町の人間をテキトーに掻っ攫ってきて、殺したときの血だよ。いやさあ、ちよつと緊迫感出したいなあって思っただけ。さすがに無傷だとなんかアレじゃない？」

「あの鬼はお前の仲間か？」

「仲間ア？ そんなわけないじゃんか！ アタシの計画にはあんな奴含まれてなかったもの。勝手に出てきたから、利用しただけ」

手をパタパタと振り扇ぎ、エミアは心底嫌そうな顔をつくった。

「……つまり、本当なら鬼はいなかった」

「そう。あいつ何なんだろうね？ よくわかんないわ」

「鬼退治と称して僕らと呼んだのは、単に暇だったからか？」

エミアはその問いに、大きく頷いた。そしてどこから取り出したのか、髪ゴムを指先で器用に持ちつつ、その長い髪の毛を乱雑に結ぶ。

「ねえ、旧介。お前は間違えてるから一応訂正するけど」

ポニーテールに結わえられた長い茶色の髪の毛が、エミアの動きにそってふわふわと揺れている。

「アタシは鬼じゃない」

「……正確に言うなら、鬼と契約した人間なんだろうよ。でも普通の人間からすりゃ、お前は立派な化け物の仲間だ」

「化け物。化け物。化け物、ねえ」

化け物という言葉に、今まで綺麗な微笑みを保っていたエミアの顔は、醜く歪んだ。

ぎりぎりと歯を噛み締め、目を憎悪に燃やしている。そこから感じられるのは深い憎しみであった。

「お前ら、何なの。アタシは人間で、でも鬼憑きなんかになっちゃっただけ。被害者じゃない。なのにお前らはアタシを化け物として扱いやがる。アタシは人間だ。人間なんだ！ 化け物として退治されなきゃいけないって何でさ。おかしいだろ！ アタシは人間だ、人間だよ」

怒りに任せた絶叫に、旧介は眉を歪めずにはいらなかった。鼓膜が痛い。それほどに、怒りと憎しみが込められた、しかしどころなく悲痛な叫びであった。

「鬼憑きだろうが、鬼と契約しようが、別にお前は退治されねえだ

ろうが。退治されるのは鬼だけだ」

「綺麗事じゃない。もしそれが真実なら、アタシは鬼を退治してもらって今頃幸せに生きていられたはずだもの」

「……何で契約なんかした。契約して人を殺せば、犯罪だと分らなかったのか」

あまりにも馬鹿馬鹿しく、愚直な問いを吐き出す旧介を見て、エミアはまた唇を笑みの形に変えた。

ハア、とその口から吐息が漏れ出す。ため息とは違う。どちらかと言えば、安堵感から出たようなものである。

エミアは細長い指先を、ゆっくりと見せ付けるように自身の胸に置いた。

「アタシはね、鬼を化け物とは思ってない。化け物だなんて思えない。コイツは、アタシが人間から迫害されてたとき、唯一アタシに優しくしてくれたんだ。アタシの理解者だ。それに比べて」

胸に置かれた手が握り締められていく。肌が白くなるほど強く握られた手は、怒りのためか小刻みに震えていた。

「人間は最悪だ。アタシの苦悩を辛さを悲しみを誰も理解しようと思わず、それどころかアタシが人を襲うだなんて頭のおかしい妄想まですやがる」

「お前は人を殺したじゃねえか」

「あいつらがそう馬鹿の一つ覚えみたいに考えてるからさ。期待に答えてやつただけだよ」

「……それは本当か？」

旧介の確認に、エミアは僅かばかり驚いたらしく、紅茶色の目をしばたかせた。

数秒の沈黙。そして、それは直ぐにエミアの笑い声に掻き消される。

「すごいな。旧介、お前もアタシの理解者になってくれるのかい？
なんで嘘だと思うのか聞かせて欲しいところだね」

「嘘だと思っただけじゃない。お前が町の奴らに腹立てたのは真実なんだろう。ただ、それで簡単に人なんて殺せやしねえさ。お前はもともと普通の人間だったんだ。だからこそ、人なんて殺せない。そんな覚悟があるわけないからだ」

「……いいねえ。じゃあ、アタシはなんで人殺しをしたんだい？」

鬼と契約すること自体は、別に罪ではない。ただ、そうすることにより、周りの目はがらりと変わるだろう。しかし、それを気にしない人間なら、異能力を手にするに惹かれ、鬼と契約してしまう。

鬼と契約しても、人間が人間であることに変わりはない。確かに、それは綺麗事だと旧介は思った。

「……鬼と契約すると、最初にとんでもない破壊衝動を感じ、次に人殺しに魅力を感じるようになる。その衝動には個人差があるけど、絶対にその殺人願望からは逃れられない。鬼と契約するということは、鬼を受け入れるということだ。鬼はもともと人を喰って生きる。鬼を受け入れることにより、考えや行動が鬼と同調してしまう。だから、契約者はもう人間とは呼ばれない」

だからこそ、鬼と契約した人間が起こす事件は後を絶たない。殺人という最低な行為に快樂を見出してしまうのだ。

契約者はもはや人ではない。あまりに中途半端な化け物だと、旧介はそう思っている。

「お前は抗えなかった。鬼の馬鹿馬鹿しい誘いにも、そして、殺人願望にも。それはどうしようもない罪なんだろうよ」

「そうだね。そうかもしれない。でも、アタシはそれについて一切の後悔もしてない」

はつきりとした意志を持ち、エミアは凜とした声でそう言った。その姿を見て、旧介は静かにため息を落とす。

「それに、人殺しが罪だ何だと言うけれど、それはあくまでも建て前でしか無いじゃないか。契約者が殺人をしましたなんていっても、それが見逃されるケースなんて腐るほどある。……ねえ、旧介」

確かに、鬼に関することは綺麗事と建て前ばかりで、汚い部分は意図的に隠されているといつていい。無責任に壁だけを作り、ジョーカー以外は鬼を殺してはならないなどという、ふざけたルールを作り上げた政府だ。政府にとっては、鬼が人を殺すことよりも、鬼がどれだけの利益を生むかが重要なことである。だからこそ、鬼については甘く見られる部分も多い。

わざわざエミアの言葉に肯定することはせず、旧介は沈黙を保つたまま、ある機会だけを窺っていた。

「お前はもともと殺すために呼んだんだけどさ、アタシ、予想外にお前が気に入っちゃってさ。どうだい？ 鬼退治なんてあほらしいことやめて、一緒に生きていかない？」

エミアの目が愉快そうに歪められる。答えを知っているからこそ誘いであることは、旧介にも直ぐに分かった。エミアにとって、これは暇つぶしでしかない。

「……生憎お前みたいなのはタイプじゃねえからさ、お断りしとく

よ」

「だろうね。アタシはお前みたいなのタイプなんだけどさ」

殺し甲斐があつて、とっても楽しそうだと、美しく微笑んだまま
エミアはそう言った。

それが始まりになる。

旧介は、今まで黙っていたメールの手を強く掴み、扉から飛び出した。時間は無い。強者はどちらか、弱者はどちらか。それが、無様にも分かっているからこそその逃亡。

エミアは追いかけてこない。追いかける必要性など無いからだろう。エミアが本気を出せば、直ぐに旧介たちは捕まるのだ。

「鬼ごっこ、か。馬鹿みてえ」

苦し紛れに吐き出した言葉は、闇の中で死んでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8951z/>

ジョーカーな狐と狸さん

2012年1月10日18時45分発行